

奉仕部の嬢さまと

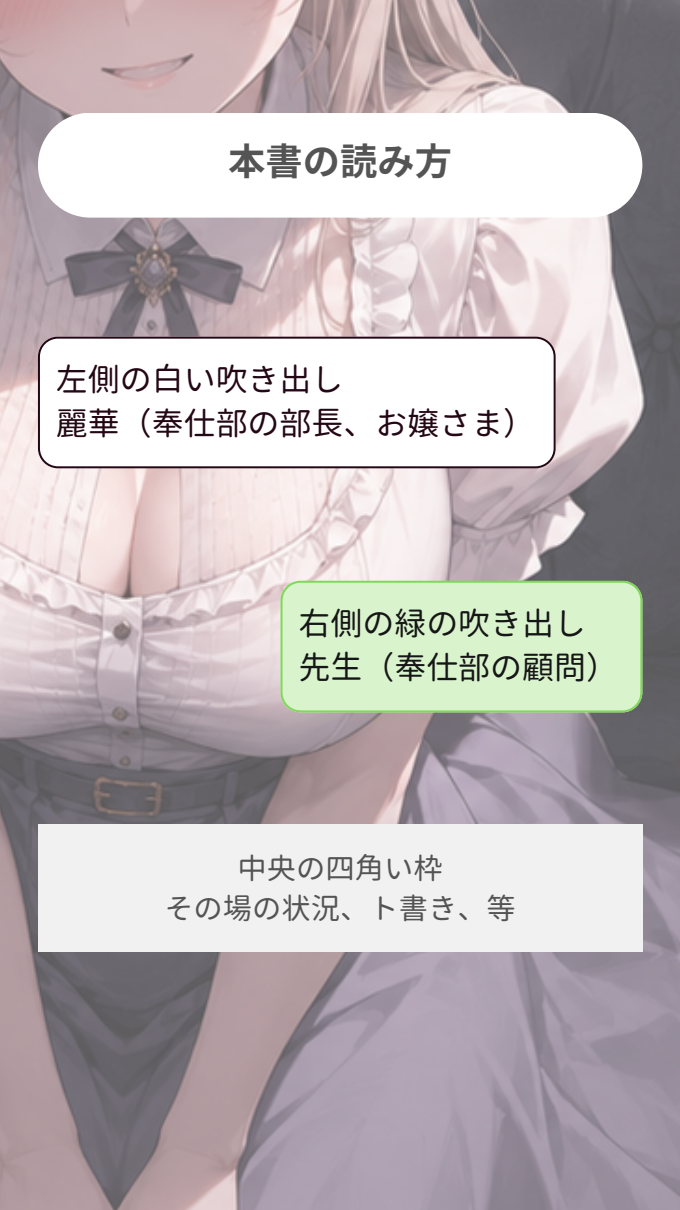
AI 調教
フェラ
パイズリ
本番

部室の高級ソファで

極大
教鞭
(50cm)

ずぶ
をずぶ
する話。

電腦ちょう教会



本書の読み方

左側の白い吹き出し
麗華（奉仕部の部長、お嬢さま）

右側の緑の吹き出し
先生（奉仕部の顧問）

中央の四角い枠
その場の状況、ト書き、等

わたしは、この学園の教師で、奉仕部の顧問をしている。

今日は、部長との打ち合わせの日。
わたしは仕事を切り上げ、部長が待っている部室に向かう。

部長はいいとこのお嬢さまで、かなりの箱入り娘だ。

品はいいのだが、どこか世間の感覚からずれているようなところもある。

まあ、「お嬢さま」というのは、そういうものなのだろう。

がちゃ、、、
部室の扉を開ける。

部長はソファに座っていた。
そして、わたしに気づいてほほ笑んだ。

わたしは部長と目を合わせようとする
が、、、

どうしても、育ちすぎた胸元に視線が離せ
なくなる、、、

「ゆ、雪の宮、、、」

「もう来てたのか」

「奉仕部の基本は、あいさつだ」

「まずは、いつものように、
ごあいさつだ」

「あら、先生。
お待ちしておりますわ」

ソファからゆっくりと立ち上がったのは、
この奉仕部の部長を務める

雪ノ宮 麗華（ゆきのみや れいか）。

白百合のような気品を纏った、
誰もが羨む超一流財閥の令嬢だ。

しかし、彼女が丁寧に一礼するたび、その
「お嬢さま」という枠組みには到底収まり
きらない、豊満すぎる胸元が衣服を押し上
げるようにして大きく揺れる。

先生である私の視線が、どうしてもその暴
力的なまでの曲線に吸い寄せられてしまう
のも無理はなかった。

麗華は私の視線に気づいているのかいないのか、いつも通りの、どこか浮世離れしたおっとりとした微笑みを浮かべている。

「ええ、
奉仕部の基本はあいさつ。
先生の教え、
しっかりと胸に刻んでおります。
それでは――」

彼女はそっと両手を体の前で重ね、深く、それは丁寧に頭を下げた。

「先生、ごきげんよう。
本日も麗華に、迷える庶民の皆さま
を救うための尊いお導きを、
よろしく願いいたしますわね？」

顔を上げた彼女の瞳は、純粹そのもの。

世間知らずゆえの危うさと、圧倒的な包容力を同時に醸し出しながら、私の次の言葉を待っている。

「ごきげんよう、雪の宮」

「今日は、月例の打ち合わせだったな」

わたしは雪の宮をソファに座るよう促す。
そして、雪の宮の隣に座る。

ほんのりと太ももが触れ、ふわりと甘く柔らかな女の香りが鼻腔をくすぐる。

「さて、日々の奉仕部の活動について、説明してもらおうかな」

「今月は、どうだったかな？」

「はい、先生。
今月も皆さまのために、
心を込めて活動いたしましたわ」

麗華は嬉しそうに微笑む。

その瞬間、彼女の太ももから、柔らかく温かい感触がダイレクトに伝わってくる。

それと同時に、まるで高級な洋菓子と白い花を混ぜ合わせたような、彼女固有の甘い香りが一気に鼻腔を満たした。

隣にいただけで、こちらの理性がじわじわと削られていくのがわかる。

しかし、当の本人はそんなこちらの動揺など露知らず、私の顔をじっと見つめながら、活動報告を始めた。

「今月は、
学内の皆さまから3つほど、
切実なご相談がございましたの」

麗華は指を一本ずつ立てながら、いたって真面目な顔で語る。

「まずは、高等部の男子生徒さんから『お小遣いが足りなくて、今月のガチャが回せない』という、人生の瀬戸際のような悲痛な訴えがございました。

ですので、わたくしのポケットマネーから、その『がちゃ』とやらを天井まで回せるだけの額を差し上げようといいたしましたの。

……ですが、なぜか彼、真っ青な顔で逃げてしまって。

庶民の金銭感覚というのは、本当に難しいものですね」

小首をかしげる彼女の胸元が、その動きに合わせて再び豊かに揺れる。

どうやら、良かれと思って莫大な金額を提示し、相手を恐怖させてしまったらしい。

「それから、女子生徒さんからは『ダイエットがうまくいかない』というご相談が。

これには、我が家のお抱えシェフが考案した、最高級ツバメの巣と金箔をふんだんに使った『超低カロリー宮廷薬膳フルコース』のレシピをお渡ししましたわ。

お口に合えばよろしいのだけれど……」

世間の「ダイエット」の概念からも大きくかけ離れた、あまりにも浮世離れした奉仕内容。

「そして3つ目は……」

麗華はそこで少し言葉を区切り、さらに距離を詰めるようにして、私の顔を覗き込んできた。

そのせいで、彼女の豊かな胸の膨らみが、私の腕にすれすれの位置まで迫る。

「『奉仕部の顧問の先生が、最近お疲れのように見える。どうかかして癒やして差し上げてほしい』という、とても優しい生徒さんからのご相談ですの。

……ねえ、先生。

先生は今、何をお求めになっ
ていらっしゃるの？ わたくしに
できることなら、何でも、奉仕
いたしますわ」

潤んだ瞳でまっすぐに見つめられ、私は言葉詰まらせた。

「ふむ、、、」
「相変わらずの奉仕活動だな」

「うちの学園は、
裕福なご家庭が多いのだが」

「雪の宮は、
お金の概念が違うというか、
なんというか」

「まあ、生徒たちの悩みが
無くなったなら、それでいいか」

「ふははは」

わたしはソファに座ったまま、ジッパーを下ろす。

「さて、その
『優しい生徒さん』
というのが、誰なのかは
分からないが」

「たしかに、疲れているかもしれな

「ほら、わたしの
極太教鞭（ちんぽ）が、
こんなに硬く凝っている」

極太教鞭は、ギンギンに硬くなっていた。

「麗華」
「いつものように、
体調管理を頼むぞ」

「まずは、見た目と臭いの
チェックだな」

「まあ……
お疲れがそんなところにまで
溜まってしまっていたのね」

麗華は純粹な、どこまでも真剣な瞳で、私のスラックスから顔を覗かせたそれを見つめた。

世間一般の「教鞭」とは明らかに違う、熱を帯びて猛り狂う肉塊。

しかし、箱入り娘である彼女にとって、これが「先生の健康のバロメーター」なのだ。

彼女は少しも躊躇うことなく、むしろ使命感に満ちた表情でさらに距離を詰めてくる。

ふわりと、彼女の甘い体香が一段と強く漂った。

「はい、先生。
奉仕部顧問の健康を守るのも、
部長としての務めですわ。

……それでは、
失礼いたしますね」

麗華は上品に膝をつき、床に身を屈めると、その豊かな胸元をソファの端に押し当てるようにして顔を近づけた。

「まずは……
見た目のチェック、ですわね」

じっと、至近距離から観察を始める麗華。

彼女の長い睫毛が、今にも私のペニスに触れそうなほど近い。

「うふふ、本当に……
いつ拝見しても、
とっても立派なおちんぽですこと。

少し赤みが強くて、はち切れそうな
ほどパンパンに張っていらっしやい
ますわ。

毎日、たくさんの生徒たちを導いて
くださっている証拠ですわね。

形も……
すごく、逞しくて素敵です」

うっとりとした、しかしどこかお医者様の
ような真面目な口調で、彼女は見た目の評
価を口にする。

それから、形の良い鼻をさらに近づけ、小
さな鼻腔をピクピクと動かした。

「次は……

臭いのチェック、ですわ」

くんくん、と、私の最奥から溢れ出る、男のフェロモンが混ざった濃厚な香りを嗅ぎ取る麗華。

その温かい吐息が、敏感な亀頭に直接吹きかかり、私は思わず腰を跳ね上げそうになる。

「……んっ

……ふふ、少し汗の香りと、
それから……先生の雄らしい、
とっても濃くて酸っぱい、
いい香りがいたしますわ。

すごく……

嗅いでいるだけで、
わたくしの頭まで
熱くなってきたてしまいそう……」

麗華は頬をほんのりと赤らめ、上目遣いで私を見上げてきた。

その潤んだ瞳には、純真無垢な奉仕の精神と、無自覚な雌の艶っぽさが同居している。

「チェックは完了いたしました、先生。

とてもお元気そうで
安心いたしましたけれど……

やはり、
少し芯が凝り固まりすぎて、
お辛そうですわ。

……いつものように、
わたくしのお口で、
優しくほぐして差し上げても
よろしいかしら？」

「麗華」

「素晴らしいチェックだ」

「だいぶ慣れてきたな」

「はい、先生。
お褒めに預かり光栄ですわ」

わたしはご褒美として、極太教鞭（ちんぽ）の竿の部分で、麗華の頬を撫でる。

麗華の美しい頬が、肉々しい極太ちんぽに撫でられ、扇情的に歪む。

麗華は頬を紅潮させながら、私のペニスで愛撫される快感に、うっとりと目を細めた。

絹のように滑らかな彼女の白い肌が、熱く猛る肉塊に押し潰され、形を変える。

その無自覚に淫らな光景は、麗華の理性を容易く消し飛ばしそうになる。

「では、お口でほぐしてもらおうかな」

彼女はコクンと深く頷くと、私の太ももにそっと両手を置き、上目遣いで私を見つめた。

「もちろん、
奉仕部の部長として、
いつもの『お作法』を忘れては
ならない」

「『おちんぼ、いただきます』
だったな」

「ええ、
もちろん覚えておりますわ。

奉仕活動には、
何事にも礼節とお作法が
必要ですものね」

彼女はコクンと深く頷くと、私の太ももに
そっと両手を置き、上目遣いで私を見つめ
た。

麗華は少し恥ずかしそうに、しかしどこまでも大真面目に、そのふくよかな唇をゆっくりと割り開いた。

溢れ出る唾液で、彼女の舌が妖しく濡れている。

「……おちんぽ、いただきます」

お嬢さまらしい完璧な発音と気品のある声で、信じられないような破廉恥な言葉が紡がれる。

言い終えると同時に、麗華は熱い吐息を漏らしながら、その小さな口を私の亀頭へと近づけた。

そして、桜色の唇を大きく広げ、溢れんばかりの熱量を持った私の先端を、じっくりと、深く、その口内へと迎え入れていった。

「んむ……っ、ちゅ、う……」

狭い口内が私のペニスを包み込み、温かく濡れた舌が容赦なく絡みついてくる。

麗華は一生懸命に顎を動かしながら、私の硬度を確かめるように、深く貪欲に吸い上げ始めた。

わたしは麗華の手を『恋人つなぎ』で握る。

そして、貪るようなフェラチオをする麗華の瞳を見つめる。

「麗華」
「いい表情をしているぞ」

「フェラチオによる奉仕活動は、
心のケアであると同時に、
技術介入度も高い」

「ストローク」

「舌の動き」

「吸引音」

「頬粘膜の締付け」

「僅かに変えるだけでも、
奉仕の気持ちよさは変わる」

「上手に、できるかな？」

「ん、んう……っ……」

私の大きな手が、麗華の白く華奢な指の隙間に滑り込み、ぎゅっと指を絡ませる。

いわゆる「恋人つなぎ」の形で完全に自由を奪われた麗華は、口内を私の肉塊で満たしたまま、潤んだ瞳を大きく見開いて私を見つめ返した。

その瞳には、お嬢さまとしての純真さと、男に尽くす喜びに目覚めかけた雌の艶っぽさが混ざり合っている。

私の言葉を聞きながら、麗華は喉を「く、くん……」と鳴らし、さらにその技術を高めようと、大真面目な顔で私の極太ちんぽを味わい尽くし始めた。

「ん、んう……っ……」

まずはストローク。

私の手を握る力を強めながら、彼女は自らの頭を大きく前後に振り始めた。

喉の奥深く、突き当たりまで一気に飲み込んだかと思えば、今度は溢れ出る愛液を唇でせき止めるようにして、根元から先端までをゆっくりと扱き上げていく。

さらに、彼女の小さな口内で、信じられないほどの変化が起きる。

「……ん、んちゅ、
うう……っ、
ジュ、ルウ……ツ！」

教鞭の裏筋、そして最も敏感な亀頭の割れ目を狙い澄ましたように、濡れた舌が執拗に、激しく絡みついてきた。

それと同時に、麗華は自らの頬をきゅっと窄め、口内の気圧を下げるようにして強烈に吸引し始める。

「ジュポ、ジュブウツ、
ん、んううーーーーっ！」

部室の静寂を切り裂く、下品で、しかしこれ以上なく官能的な割れ鐘のような吸引音が響き渡る。

お嬢さまの口から鳴り響いているとは到底信じられないその淫らな音は、麗華の肉体そのものが、私のペニスを極上の快楽で絞り尽くそうとしている証拠だった。

「……んんーーーーっ！
む、ぐう……ッ！」

内側の肉壁が、私のカ리를締め付ける。

麗華は、私が教えた技術のすべてを体現しようと、必死に、そして貪欲に口腔を波打たせていた。

絡め合う指先から、彼女の驚くほどの熱量と、心臓の鼓動がダイレクトに伝わってくる。

ひとしきり激しく吸い上げ、口からペニスを溢れさせた麗華は、口端から一筋の銀の糸を引かせながら、ハアハアと熱い息を吐いて私を見上げた。

「……はあ、んっ……
せ、先生……っ。
麗華の……ほうし、
上手に……できて、
いらっしゃいます、か……？」

これほど淫らな行為をしておきながら、その表情はまるで、先生に褒められたい一途な優等生のそれだった。